

第1回県立大学の設置の是非を検討するための有識者会議 議事概要

- 1 日 時：令和3年6月8日（火）17：00～19：00
- 2 場 所：三重県庁講堂棟 131・132 会議室およびオンライン
- 3 出席委員
宇野 健司 株式会社大和総研 リサーチ本部 副部長
倉部 史記 NPO 法人 NEWVERY 理事、追手門学院大学 客員教授
中村 佳子 株式会社丸中商店 代表取締役社長
西村 訓弘 三重大学 地域イノベーション学研究所 教授
長谷川 敦子 三重県立津西高等学校 校長
吉田 文 早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授

4 内 容

(1) 出席者紹介

各委員が自己紹介を行いました。

(2) 議長選出

互選により、西村委員が議長に選出されました。

(3) 資料説明

事務局から資料1から資料6について、内容を説明しました。

(4) 意見交換

○学びの選択肢の拡大を図るうえでの、大学の必要性について

また、人口が減少していく見込みの中での、今後の大学の必要性や役割について今後の大学の必要性や役割について

- ・「川を遡って、海を渡れ」という言葉があるように、新しいことを始める時は、過去の経緯を遡り、海外の事例を参考にすべき。過去の経緯を鑑みると、昔は高校まで卒業すれば十分であったため、地方自治体は高校まで関与すれば良かった。しかし、今は大学進学率が高まっていることから、大学まで一定の関与が求められる。
- ・海外の事例でいうと、アメリカでは、一つの州に複数の州立大学が設置されており、手厚い教育により人材を育成し、地元企業に人材を供給する役割を果たしている。その意味からも、県立大学については検討の余地がある。
- ・県内高校生が県外へ転出するのは、希望する大学や学部がないからなのか、その他の要因があるのかについて、調べた方が良い。また、県立大学を設置するのであれば、どのような若者のために、どのような教育をするのか検討する必要がある。それらがきちんと議論されるのであれば、公立大学が増えること自体は、社会からみれば悪いことではない。
- ・高校では全国的に国公立大学をめざすよう指導がなされており、三重県に県立大学が設置された際、全国の高校生が三重県立大学をめざすことが想定される。新しく県立大学を設置したとしても、県内入学者が2割に満

たない学校となる可能性もある。それは果たして、めざすべきところなのかどうか、よく検討する必要がある。

- ・ 県内高校生が県外へ進学する理由が大学進学者収容力にあるのか判断するためには、県内高校生がどういった大学へ入学しているのかを調べる必要がある。また、県内大学の志願倍率や定員充足率の推移はどうなっているのか、県内大学の需要がどれくらいあるのかについても調べる必要がある。
- ・ 90年代以降、公立大学の設置が増えている。しかし、設置するだけでなく、大学として維持していくには、マーケットを見据え、学生が学びたい領域のデータもあつた方がよい。
- ・ 小規模な公立大学では統合をしたり、国立大学と連携をしたりして、規模の経済を働かせている。どのくらいの規模であれば大学として成立するのか、調べたほうがよい。
- ・ 県内企業の社長によると、三重県に残って就職する学生は、語学力と気力が十分ではない学生が多いとのことである。優秀でやる気のある学生は県外の大学へ進学し、県内に残る穏やかな学生では、企業の中核を担える人材が少ない。全体としてそのような傾向が見受けられる。
- ・ 県立大学を設置するのであれば、どういう学校にして、どういう学生が通ってくれたらよいのか、検討する必要がある。県外出身の学生であっても、県内で育ち、県内企業に就職してもらえたい大学であってほしい。
- ・ 県立大学が設置され、高校生の選択肢が増えることはありがたい。高校生が大学を選ぶ理由は、経済的な理由、希望する学部・学科、相応の学力など、さまざまである。三重県は、東海圏にも関西圏にも出ていきやすいといった立地的な事情がある。
- ・ 通学のしやすさを考慮すると、県外出身の学生が多くなり、結果として県内の学生が行けない大学になってしまう可能性がある。それであれば、通学が不便な土地であっても、寮などの設備を備え、一定の地域枠を作るといった方法もある。どのようなイメージの大学を設立するのか、しっかり議論することが必要である。
- ・ 進学できる定員を増やす意味で大学をつくるのであれば、やめた方がよい。子どもは、情報さえあれば、自分で良い大学を選んで進学する。学生のための大学、学生の将来のためになる大学であれば、つくる意義がある。
- ・ 魅力的な大学であればあるほど、県外から進学する学生も多くなる。地域枠で入学した学生が、地域に戻り活躍しているという現実もある。地域枠の必要性を検討することは良いと考える。
- ・ 大学を設置するかどうかではなく、どういう大学なら新設する価値があるのか、具体的な条件をあげていき、最終的にどういう大学なら設置すべき

なのかを決めていくべきである。

- ・大学をつくるには哲学がなくてはいけない。どのような哲学をもって、どのような大学をつくるのか、明確にしていく必要がある。

○高等教育における県の役割について

- ・私立大学は市場の原理が働き、近年ではマーケットのある都心回帰の傾向にあるが、それは部分最適であって、全体最適にはならない。教育の機会提供という公共の利益を考え、市場の原理では足りない部分を補うことが、国や地方公共団体の意義であると考ええる。
- ・国公立大学は学費が安く抑えられるため、経済的な面で進学が難しい生徒に教育の機会を提供できる。更に、県外での1人暮らしはかなり経済的に負担が大きいが、県内に大学があれば通いやすく、負担も少ない。
- ・県立大学ができたことで、周辺の私立大学にも良い影響があり、その大学に行けなかった生徒にとっても良い効果がある、そういった大学ができるのであれば意味があると考ええる。
- ・大学の設置以外においても、県ができることはたくさんあると考ええる。高大の教育の質を上げていく、マッチングできるような仕組みづくりの旗振り役なども、そのひとつである。そのような学びの仕組みづくりは個々の大学・高校ではできない。
- ・都道府県の中には大学に関わる部署がなく、大学のことを分かる職員がいない県がある。法人化するののかも含め、大学を維持していく職員をどうするかをよく考えておくべきである。
- ・また、議会の承認がおりないと県立大学に予算が配分されないため、議会への説明責任を果たし、成果を示すことが重要である。
- ・県立大学の設置により、地域全ての大学に良い効果を生み、地域の学生のやる気・モチベーションを上げてくれるような大学となってほしい。
- ・県立大学と県立高校の関係性があれば、産学連携の中で高校もつながるよう、地域内で研究の成果が還元する教育の仕組みなどがあれば良い。
- ・三重県で学ぶことの優位性は、三重県というフィールドを教育の場にできることにあると考ええる。三重県を、社会の最先端の課題を解決するリアルなフィールドの場として開放していく。県として、県内産業をこうしていきたいという方針と連動することも可能であると考ええる。

○地方創生の観点から見た大学の意義や果たすべき具体的な役割、 オンラインを活用した高等教育の可能性について

- ・オンライン授業は、移動に時間がかからない利点がある。先生によっては十分な教育効果がある。また、オンライン授業が可能であれば、三重県で

- も努力次第で良い教員を集めることが可能である。
- ・現在の高校生の進学ニーズを見ると、たとえば医療系の分野を希望する方は多い。だが、県とした見た時に、医療系大学だけを作っていて良いのかという問題がある。県が育成をするのであれば、産業を新しく興すような県が必要とする人材ではないかという考え方もある。
 - ・県外大学への進学理由として、「一度は外へ出てみたい」ことが多い。沖縄県のある大学では1年間、東京の大学で学習できる制度を設けている。こうした際には、オンラインで地元とつながることができるといった使い方も可能である。
 - ・大学には、社会と学生を繋げる意義がある。大学だけでなく、社会や高校の関わりを議論していくと良い。
 - ・大学でも、地方創生の議論がある。他の学部の定員を削減して地域に貢献する学部をつくる大学があるが、うまくいっていないことも多い。将来的に地域での新規産業の創出をめざすにしても、既存の産業とどう連携していくのか考える必要がある。
 - ・オンラインだけでは人材育成はできず、どのように対面の場を作っていくかが大切。特にモチベーションが低い学生にとっては、オンラインだけで教育することは難しい。オンラインと対面の組み合わせを考えて活用していく必要がある。
 - ・オンラインには、いろいろな教授の講義が聞けるという利点がある一方で、学生同士の交流の時間、責任なく楽しく過ごす時間がなくなってしまう。学生たちをどうやって大人に育てるのかという視点では、オンラインだけでなく、現実とつなぎ合わせて育成することも重要である。
 - ・高校でもオンライン授業を実施しているが、現場の空気感を感じながら授業を聞くことも大切であり、バランスが大事である。
 - ・単に大学で学ぶ学生を、高校から進学した生徒だけに限定する必要はない。リカレント教育にとっては、オンラインは有効である。多様な人が集まり、それらの人々をかき混ぜる場として、全く新しい理想的な大学をつくってほしい。